

国立アイヌ民族博物館におけるニヴフの音具資料—カリニ¹を中心に

Nivkh sound-producing tools in the National Ainu Museum: Focusing on the Kal'ni

荒川のぞみ (ARAKAWA Nozomi)

国立アイヌ民族博物館研究学芸部教育普及室エデュケーター (Educator, National Ainu Museum)

キーワード：ニヴフ、音具、楽器、国際交流、アイヌ民族博物館

Keywords: Nivkh, sound-producing tools, music instruments, international exchange, Ainu Ethnic Museum

1. はじめに

1.1 当館所蔵資料における

アイヌの周辺民族資料について

2020年に開館した国立アイヌ民族博物館（以下「当館」）は、アイヌ文化の展示や調査研究などに特化した国立博物館である。その資料の一部は、1984年から2018年まで運営されていたアイヌ民族博物館（以下「旧アイヌ博」）の所蔵資料を引き継いだものである。旧アイヌ博では多年にわたりアイヌ文化に関する資料の収集と保存、展示を行うとともに、様々な民族との文化的交流を推進し、地域や国境を越えた諸民族との交流を積極的に行う中で、各民族の民具等を収集してきた。本稿は、文化交流で収集された民具等のうち、ニヴフの音具資料を取り上げるものである。

1.2 本稿の目的と意義

当館におけるニヴフの音具資料は、旧アイヌ博時代の国際交流事業によって収蔵された経緯があり、アイヌ民族の文化交流の歴史的証左であるとともに、単なる民具資料であることを超えて、当館のコレクションとして重要な意義を持つ。本稿では当館が所蔵するニヴフの音具資料を紹介し、資料情報を整理することで、当館における音具資料展示のあり方について考え、今後の調査研究や展示への一助としたい。

1.3 紹介する資料の範囲と方法

楽器とは、「音楽を奏するための道具」（柘植1991:76）であるが、何を「音楽」とするか/しない

かは、民族的・文化的背景、さらには時代的変遷によって多様な解釈がなされる。そのため、何を「楽器」とするか/しないかについての判断は、当事者の視点や資料に基づいた慎重な検討が求められる。したがって、「楽器」としての定義や分類にも不確実性が存在する。

本稿では、今後行われるべき当館所蔵楽器資料の体系的整理のために、当館所蔵のニヴフの楽器資料の収蔵経緯を含む基本情報をまとめたいと考えている。そのため、本稿では上述の不確実性を自覚したうえで、ニヴフの楽器の定義はニヴフ民族が決めるべきであるとする筆者の文化相対主義的な立場から、音を発することを目的として製作された道具を「音具」とし、儀礼具や玩具、あるいは用途が複合的である資料も含めて調査対象とした。音具資料については、楽器の発音原理に基づいた分類法であるホルンボステルとザックスの分類法（以下、HS分類法）を用いて分類する²。このうち、トランペットに関しては下記のような分類があり、カリニは423.121.11に該当する。

- 423 トランペット
- 423.1 自然トランペット
- 423.12 管型トランペット
- 423.121 上端吹きトランペット
- 423.121.1 上端吹き直状管
- 423.121.11 マウスピースなし

本稿でとり上げる音具は当館の資料検索データベースに登録されているカリニを中心とした7点である。

 <p>写真4 カリニ</p>	<p>資料番号: nivkhmi04 資料名: 楽器 HS分類番号: 423.121.11 楽器名: カナ表記 カリニ キリル文字表記 кальни ローマ文字表記 kal'ni 長さ: 1867mm 最大部直径: 49mm 最小部直径: 26mm 備考: 開口部にささくれが見られる。</p>
 <p>写真5 カリニ</p>	<p>資料番号: nivkhmi05 資料名: 楽器 HS分類番号: 423.121.11 楽器名: カナ表記 カリニ キリル文字表記 кальни ローマ文字表記 kal'ni 長さ: 1690mm 最大部直径: 40mm 最小部直径: 24mm 備考: 節付近に剥げが見られる。</p>

3.2 その他

3.2.1 膜鳴楽器

膜鳴楽器は、膜の振動によって発音する楽器のこと

である。カスは、バチを用いて太鼓を叩くことで音が出る。

 <p>写真6 カス</p>	<p>資料番号: nivkh14 資料名: バチ付き太鼓 HS分類番号: 211.321 (杵型太鼓、片面(皮)) 楽器名: カナ表記 カス キリル文字表記 кас ローマ字表記 kas 太鼓部分 高さ: 484mm 幅: 360mm 奥行: 43mm バチ部分 高さ: 358mm 幅: 75mm 奥行: 33mm</p>
---	---

3.2.2 弦鳴楽器

弦鳴楽器は、弦の振動によって発音する楽器のことである。

	<p>資料番号：nivkh21 資料名：楽器 HS分類番号：不明 楽器名：不明</p> <p>長さ：577mm 奥行：111mm 備考：トインルインの弓だと考えられるが、本体部分の収蔵が確認されていない。⁵</p>
---	--

写真7 不明

4. まとめと今後の展望

本稿では、当館が所蔵するニヴフの音具資料について紹介した。音具資料は民族文化を担う要素の一つであり、その保存は文化的多様性の記録としても意義あるものである。また、当館のこれらの資料は単なる音具資料ではなく、国際交流事業とのつながりが見出せるなど、重要な資料情報を持っていることが分かった。

当館に収蔵された音具資料はこれまで「民具」の一カテゴリとして位置づけられてきたが、基本展示において十分に活用できていない現状がある。当館の基本展示は、「私たちのことば」「私たちの世界」「私たちの暮らし」「私たちの歴史」「私たちのしごと」「私たちの交流」の6つのテーマに分類されている。(国立アイヌ民族博物館 2023:13)。このうち、ニヴフの音具資料を展示する余地があるのは「私たちの暮らし」「私たちの交流」であるが、「私たちの暮らし」ではアイヌ民族の生活文化に関する資料が主に取り上げられており、ニヴフをはじめとする他民族の音具をこのテーマに配置することは現在の展示方針上積極的には行われていない。民族間の文化交流については「私たちの交流」のセクションで展示されているが、展示スペースの制約により、展示している音具資料が数点に限られているうえ、キャプションでの解説も概説的なものに留まっている。

さらに、当館の展示においては、シャーマンが使

用する太鼓が儀礼具として「私たちの世界」に、鹿笛が狩猟の道具として「私たちのしごと」に、ムックリ(口琴)、トンコリ(五弦琴)、シントコプタ(行器の蓋)が楽器として「私たちの暮らし」に展示されている。音具資料が複数の展示セクションに分けて配置されていることで、音具の音響的・音楽的側面に着目して展示されている資料もあればそうでない資料もあり、音具資料の体系的な展示ができていない現状もある。展示や活用においては、音具の文化的・歴史的意義を伝えるだけでなく、その音具がどのような音を発するのかをどのように体験的に提示できるかが今後の課題である。展示におけるメッセージや当事者の楽器の認識に応じて、当館所蔵資料がどのテーマに分類されるかは固定的なものせず、定期的にそのカテゴリを見直す必要があるだろう。

注

- 1) ニヴフ語の表記については、A.C.カラソフスキー(1992)「サハリンのニヴフ族の楽器」『口琴ジャーナル No.5』に基づく。
- 2) 『ニューグローヴ世界音楽大事典第4巻』(1993、講談社)のホルンボステルとC.ザックスによる楽器分類表を参考に分類。
- 3) 1988年10月にサハリン州立図書館(ユジノサハリンスク)およびハバロフスク郷土博物館(ハバロフスク)において開催された「北海道アイヌ展」にあわせ、「シベリア・極東博物館学術会議」が開催された。本会議には、伊藤裕満氏、中村齋氏、山丸和幸氏が出席し、学術交流を行った。会議終了後、伊藤氏および山丸氏はサハリン北部に位置するノグリキを訪問し、ニヴフの人々との直接的な文化交流も行われた。

交流の場では、ニヅフ側より熊祭りにおける踊りや哀傷歌が披露され、これに対して山丸氏はアイヌの口琴であるムックリを演奏し、相互の伝統音楽による交流が実現した。この訪問を契機として、翌年の1989年に白老で開催された北方民族国際フェスティバルにニヅフの人々が招待されることとなり、継続的な国際的文化交流の一端を担う結果となった(財団法人アイヌ民族博物館 1989a:2-3, 8; 財団法人アイヌ民族博物館 1989b:2-4; 北海道新聞 1988)。

- 4) カリニ5本とともにタグが保管されており、タグには1998年1月28日の日付とイベント名(ニヅフ族伝統舞踊のタペ)が記載されていた。
- 5) 1993年8月5日~29日に紋別市立図書館で行われた「オホーツクの民族・ニヅフ展」に旧アイヌ博がトインルイン(キリル文字表記: тыһрыһ, ローマ字表記: tynryn)を貸し出したことが分かっている。niṽkh21がトインルインだった場合、HS分類番号は321.313(筒型差し込み柄リュート)である。トインルインは弓を用いて弦をこすことで音が出る。弦を押さえて音程を変えたり、弦に口をくっつけながら弾く奏法もある。

参考文献

国立アイヌ民族博物館

2023『ウアイヌコロ コタン アカラ ウボボイのことばと歴史』東京: 国書刊行会。

財団法人アイヌ民族博物館

1989a『アイヌ民族博物館だより 1989.1.31 No.17』白老: 財団法人アイヌ民族博物館。

1989b『アイヌ民族博物館だより 1989.7.31 No.18』白老: 財団法人アイヌ民族博物館。

1993『アイヌ民族博物館だより 1993.3.31 No.24』白老: 財団法人アイヌ民族博物館。

1996『財団法人設立20周年記念誌 二十年の歩み』白老: 財団法人アイヌ民族博物館。

C.A. カラソフスキー

1992「サハリンのニヅフ族の楽器」『口琴ジャーナル No.5』pp.6-8 島添貴美子訳、埼玉: 日本口琴協会。

白老町

1993『しらおい 1993年3月号』白老町。

柘植元一

1991『世界音楽への招待 民族音楽学入門』東京: 音楽之友社。

北海道浅井学園大学北方圏学術情報センター

2003『音楽プロジェクト サハリン先住民族「ニヅフ」の伝統芸能アンサンブル「イフ・ミフ・ニヅグン」ポルト公演に基づく報告書』江別: 北海道浅井学園大学。

北海道新聞

1988.11.23『<ひと88>少数民族文化の交流一ツ連でのアイヌ資料展開催に尽力した 伊藤裕満さん(34)』札幌: 北海道新聞社。

19 世紀中葉のアムール川下流域およびサハリン周辺の 先住民族交易に関するロシア民族学者の記録 II

邦訳：レオポルド・フォン・シュレンク『アムール地方の異民族たち』
10 章 交易 オリチ、ゴリド、ビラル、マネギル、ダウール

Records of Russian Ethnographers on Indigenous Trade in the Lower Amur River Basin and Sakhalin
in the Mid-19th Century:

Japanese Translation of Leopold von Shrenk, “Ob inorodtsakh Amurskogo kraya”
Chapter 10 Trade, Ol’chi, Gol’dy, Birary, Manegiry, Daury

監訳・解題 (Supervision and the Review)

佐々木史郎 (SASAKI Shiro, Dr.)

国立アイヌ民族博物館 名誉館長 (Honorary Director, National Ainu Museum)

翻訳 (Translation)

是澤櫻子 (KORESAWA Sakurako)

国立アイヌ民族博物館 研究員 (Research & Curatorial Fellow, National Ainu Museum)

1. 解題

本稿は『国立アイヌ民族博物館研究紀要』第3号に掲載された、佐々木史郎・是澤櫻子・鈴木建治「19世紀中葉のアムール川下流域およびサハリン周辺の先住民族交易に関するロシア民族学者の記録 邦訳：レオポルド・フォン・シュレンク『アムール地方の異民族たち』10章 交易 ギリヤーク」(佐々木・是澤・鈴木 2024: 263-281)の続編で、第10章の残りの部分(Шренк 1899: 298-314)を翻訳したものである。具体的には前回翻訳したギリヤーク(ニヴフ)以外のアムール川流域諸民族の交易活動に関するシュレンクの調査記録と文献を使った過去の記録との比較研究である。ここで言及されるのは、オリチ(ウリチ)、ゴリド(ナーナイ)、オロチ(オロチとウデヘ)、オロチョン、ビラル、マネギル(いずれも現在は中国領内の「鄂倫春族」に含まれる)、ダウール(ダフル)の諸民族の交易活動である。さらに今回翻訳した箇所では重要なのは、間宮林蔵の調査記録との比較が行われている点である。

林蔵が樺太(サハリン)とアムール川下流域を調査したのは1808～09(文化5～6)年であり、シュレンクの調査(1854～56年)よりも半世紀近く前にな

る。シュレンクが林蔵の調査記録を利用できたのは、Ph. F. von シーボルト(大シーボルト)のおかげである(訳註ii参照)。シーボルトは1826年の江戸参府の時に最上徳内や高橋景保らと知り合い、その際に間宮林蔵口述・村上貞助筆記による樺太とアムール川下流域の調査記録の写本を手に入れた(洞・谷澤 1988: 278)。恐らく当時手に入れることができたものは、林蔵たちが1810(文化7)年の秋に作成した『北蝦夷地部』と『東韃紀行』を底本とする写本類だったと推測される。現在国立公文書館に所蔵され、重要文化財に指定されている『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』(両者ともに1811(文化8)年春献上)は幕府に献上され、一般の目に触れることはまずなかった。実際、巷に流布している写本類は『北蝦夷地部』と『東韃紀行』を底本とするものが圧倒的に多い。平凡社東洋文庫から『東韃地方紀行他』というタイトルで献上本の『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』を校訂、編集、刊行した洞富雄と谷澤尚一の「解説」によれば、シーボルトの『Nippon』の図版(Tafelband)所収のアイヌ、ウイльта、ニヴフを描いた図(図352-359)は、長崎の画工でシーボルトの江戸参府に随行した川